物語文の展開に関する推測を規定する要因

○伊藤 尚枝

(恵泉女学園大学)

物語文、人物の振る舞いを推測、感情

Factors specifying the image of stories to come next.

Hisae Ito

(Keisen University)

Story, expectation for character, emotion

目 的

本研究では、参加者に物語文を呈示して、その展開を想像して登場人物の振る舞いを推測してもらう。おなじ物語文を読解しているのだから、同等の展開を推測するのだろうか？それとも異なる展開を推測するのだろうか？もし、登場人物の振る舞いを異なって推測するときには、そのような違いが、物語文のどのような要因に規定されるのかを検討する。

方 法

1. 実験参加者 女子大学生 75 名 (年齢範囲 19～21 歳)
2. 刺激呈示文 「山小屋」(1200 字程度)を使用した (女のレポート編集部編, 2010, pp. 112-113)。あらすじを Table 1 にまとめて示す。
3. 手続 呈示文を黙読してもらったあと、① 12 項目で構成したアンケート (Table 2) に回答してもらった。② 次に、呈示文の続きを想像してもらって、このあと息子は「どこかの企業に就職できると思う」程度を評定してもらった。①と②の質問には、まったく当てはまらない (1 点) ～もともと当てはまる (9 点) までの 9 点法で回答してもらった。

Table 1 呈示文のあらすじ (実験場面では、原文を呈示した)

場面 1	高校を卒業した息子は、就職浪人中である。 毎日ブラブラして、社会人になるという自覚がない。
場面 2	そんな息子が、ある日突然、山小屋で働くと言い出した。 山小屋でのアルバイト経験がある父親は、「きつい仕事だぞ」と忠告する。
場面 3	山小屋での仕事は、登山シーズだけの短期アルバイトである。 現在、中盤にさしかかった。今まで 3 回家に帰ってきたが、 たくましくなるところか、帰ってくるたびにゲツソリやつれていく。 しかし、息子はけっして辞めたいとは言わない。
場面 4	そんな息子を、父親は「いい面構えになったじゃないか」と褒める。 他方、母親の私は、息子のように胸のつぎれる思いがする。
場面 5	息子は、再び山小屋へと戻っていった。離れて暮らして、毎日言葉をかけてやれないことが、こんなにも辛いと思わなかった。 アルバイトの期間を満了して帰ってきたら、精一杯の気持ちを込めて、「お帰りなさい」と言って迎えてあげたい。

結 果

12 項目のアンケートの評定結果を、因子分析で解析した。固有値が 1 以下の項目 (4 項目) を分析から除外すると、3 つの因子を抽出することができた (Table 2)。

息子が「どこかの企業に就職できると思う」程度の評定値を昇順に並べて、点数の低い 18 名 (1～4 点) を期待低群とした。他方、点数の高い 21 名 (7～9 点) を期待高群とした。高群と低群とで評定平均値を算出して、対応のない t 検定を行うと有意差が認められた (Table 3)。期待高群のほうが、低群よりも、息子が近い将来に就職できるという明るい展開を想像していると言ってよいだろう。

高群と低群ごとに、3 因子の下位得点の平均値を算出した (Table 4)。下位得点の平均値に差があるかどうかを対応のない t 検定で調べると、記述の躍動性 (因子 1) と、人物に対する親和性 (因子 3) で有意差が認められた。けれども、出来事の類同性 (因子 2) では有意差が認められなかった。

Table 2 因子分析の結果 (主因子法、バリマックス回転、 $N=75$)

	I	II	III	共通性
因子 1 : 記述の躍動性				
文章の運びが、筋が取りやすい。	.76	.32	-.14	.29
話の進め方が明るく思う。	.76	.08	.22	.45
使われている表現が生き生きしている。	.50	-.02	.43	.24
話の背景がわかりやすい。	.38	.31	.10	.43
因子 2 : 出来事の類同性				
読みながら、続いて展開する出来事が予想しやすかった。	.24	.63	-.04	.70
発生していた出来事は、よくある出来事だと思う。	-.05	.52	.15	.25
息子が何をしようとしているのか理解しやすい。	.21	.44	.12	.63
因子 3 : 人物に対する親和性				
息子は、親しみやすい人だ。	.08	.21	.73	.59
分析から除外した項目				
話の背景がわかりやすい。				
話の展開が、ただだらけている。				
主人公が誰なのかはっきりしている。				
母親は親しみやすい人だ。				
因子寄与	1.66	1.10	.84	3.60
累積寄与率	20.76	34.55	45.01	

Table 3 息子が「就職できると思う」の平均値と標準偏差 (カッコ内の数値は標準偏差) (両側検定, ** $p<.01$)

期待低群 $n=18$	期待高群 $n=21$	t 値	自由度
3.17 (1.15)	7.48 (0.68)	14.49**	37

Table 4 高群と低群ごとの下位得点の平均値と標準偏差 (カッコ内の数値は標準偏差) (両側検定, * $p<.05$)

	期待低群 $n=18$	期待高群 $n=21$	t 値	自由度
記述の躍動性	4.47	5.49		
因子 1	(1.03)	(1.32)	2.67*	37
出来事の類同性	4.59	5.26		
因子 2	(0.99)	(1.38)	1.70	37
人物に対する親和性	3.83	5.24		
因子 3	(1.04)	(1.99)	2.68*	37

考 察

同じ物語を読解したのに、息子が企業に就職できると思う高群と思わない低群が発生した。この違いは、認知的な要因 (出来事の類同性) 以上に、感情的な要因 (記述の躍動性、人物に対する親和性) に規定されていたと推測できる。この結果は、読者の能動的な読解活動を示唆している。

引用文献

女のレポート編集部編 (2010). 大沢悠里のゆうゆうワイド 女のレポート心にしみる 100 の話 TBS サービス, pp. 112-113.